

科学研究費補助金(学術創成研究費) 目録学の構築と古典学の再生」研究グループ主催

2008年春季第2期学術講演会 第5回 公開講座【古典を読むー歴史と文学ー】

2008年7月19日(土) 於金鵝会館

樹木の古代史(要旨)

三宅和朗

『古事記』『日本書紀』『風土記』には樹木—とくに巨樹に関する伝承が散見している。それによると、巨樹とは異界である地中に根を張り、異界である空中に向けて立つ世界樹・宇宙樹であり、巨樹そのものが呪力を持ち、時には神の依代にもなるという存在であった。しかも、巨樹は伐採された後も、船・塩・琴・大工(新羅人)・仏像になったと伝承された。このうち、船は海という異界とつながり、同様に塩は海という異界の産物であった。異界の神を招く道具である琴、新羅という異界から到来した優秀な大工(猪名部)、異界の存在である仏像と、巨樹のもつ異界性は伐採された後も、形を変えながら継承されると観念されていた。

巨樹には朝日・夕日が当ると巨大な影ができるという伝承もあった。その影の範囲には大王や首長の支配が及ぶとみられる。この点では、天一東一鄙に枝が覆っているという雄略の朝倉宮の「百枝槻」が注目される(『雄略記』)。そもそも、五～七世紀の大王の宮に樹木の名前が含まれる例があるのは、「百枝槻」のように巨樹が大王の支配と関係するからであろう。しかも、大王の宮の巨樹は大王の神祭りの際の依代ともみられる。というのも、天孫降臨神話で天孫に降臨の命令を出すタカミムスヒの別名、高木神(『神代記』)と対応すると考えられるからである。そして、このような大王宮の巨樹の呪力を背景として、地方首長(周防国の神夏磯媛)が天皇に服属する際に、剣・鏡・玉をかけた樹木を献上するという伝承(『景行紀』)が生れたと推定される。

ところで、大王の支配を表す巨樹が昇華した存在が飛鳥寺の西の大槻であろう。この巨樹の呪力は天武・持統朝には遠く多禰嶋人・蝦夷・隼人の地にまで及ぶと考えられ、大槻のもとで夷狄の服属儀礼が行なわれていた。しかしながら、飛鳥寺の西の大槻は持統九年(六九五)を最後に正史から姿を消す。大宝律令の施行を契機に、夷狄の服属の場は藤原宮大極殿・朝堂へ、神祭りの役割は神祇官八神殿(タカミムスヒをまつる)や伊勢神宮(内宮の心御柱)に譲ったものとみられる。その一方で、地域社会において、八世紀以降も郡家や首長の居館では巨樹との関係が喪失したわけではなかったことは諸史料からも窺い知られる。

一二世紀の大開発時代に巨樹の伐採が進行したが、かかる巨樹が支配を表徴するという観念そのものは、中世社会にも継承された。将軍を大樹といい、あるいは竹木が家・館・城の繁栄のシンボルとなるというのはその証左といえよう。

以上、古代の人々の樹木への思い(心性)に迫ろうとした。中世史料にみえる巨樹と死・再生とのつながりという点は古代伝承に乏しい。これには歴史的な展開を考えねばならないのであろう。